

古今著聞集序

夫著聞集者，寧縣亞相巧語之遺類，江家都督清談之餘波也。余稟芳橘之種，胤瓊杖之樗質，而琵琶者，賢師之所傳也。儻辨六律六呂之調，圖畫者，愚性之所好也。自養一日一取之心，於戲春鶯之囀，花下秋鴈之叫，月前暗感幽曲之易，和風流之隨地勢，品物之叶天為，悉憶秋筆之可寫。繇茲或伴伶客，潛樂治世之雅音，或託畫工略呈振古之勝槩，蓋居多暇景，以降閑。



度祖年之故據勸此兩端搜索其度夏註
 緝為三十篇編次二十卷名曰古今著聞
 集頗雖為狂簡聊又兼實錄不敢窺漢家
 經史之中有世風人俗之製矣只今知日
 域古今之際有街談巷說之談焉猶愧淺
 見寡聞之踈越偏招博識宏達之盧胡勞
 不出螭廬謬比鳴寶于時建長六年應鐘
 中旬散木士橘南表慙課小童猥叙木較
 而已

古今著聞集物目錄

- 卷一 神祇 卷一
- 卷二 祝教 卷二
- 卷三 政道忠臣 卷三
- 同 公事 卷四
- 卷四 文學 卷五
- 卷五 雜奇 卷六
- 卷六 管絃舞 卷七
- 卷七 雜書 卷八
- 同 術道 卷九

卷八 孝弟慈愛 才十

同 好色 才十一

卷九 武勇 才十二

同 弓矢 才十三

卷十 了藝 才十四

同 お撲強力 才十五

卷十一 畫場 才十六

同 蹴鞠 才十七

卷十二 摺賣 才十八

同 偷盜 才十九

卷十三 祝言 才二十

同 哀傷 才二十一

卷十四 抱挽 才二十二

卷十五 宿執 才二十三

同 國津 才二十四

卷十六 真言利口 才二十五

卷十七 粧異 才二十六

同 變化 才二十七

卷十八 飲食 才二十八

卷十九 草木 才二十九

目錄終

古今著聞集卷第一

神祇第一

天地のまごころのれど渾沌雞牝子のごとくその
 こと先づかみかきびきて天とありあはまるといふ
 ことありとて地とありとて天とありとて地とありとて
 川ののりかきとて葦牙れとてとれとて死
 て神とあり國常とてあまのりそれよりこの
 くこと天神七代地神八代より彦波瀲武鸕鷀草
 薙不合尊れは子神武天皇よりそ人代とあり
 よとてそのはとて成子れとて九月ふとて先とて

いろくの神祇まつりきまり才十代崇神天皇
 六年は天照大神を皇孫色ふまのひまほ同止
 小天社本社とよび秘伝諸神の神戸とてあり
 然そののち世に傳り民ゆこうなり才十一代崇
 仁天皇二十六年三月ふあまてみ山神はは
 なるよあまのひく伊勢にぬいともれ川くみよとい
 て才二のひめみこ備後命と命をよきて傳つて
 きたりたをそまがてうん神あまのく大木に神祇
 敷をんぞく権化のた威を意のあむくつうど
 のなりいとあり神切皇后に三韓とあのぞ

かの天邪地祇あまのくわつれあひせりと
 これふりてあまのくもたに社にせんぞん
 ささきとめりつう百五百代のこんとんそ
 是は天子よりと先とあまのくあまのく
 そのめりつとあまのくといふ事(神)のんび天
 皇は神宮あんのやく元年八月四日うたれ
 神とせんよびあまのくこれ中よと界の化
 て方便とめりしてお生城とらびくあまのく
 あまのくがまのくといふなりやまのく
 わられぬあまのくとくそんぞんぞれ

内侍本_のひじりハ_の攝政_の末子_をあまのり_をせ
らむも_の海_をと_のつう_をぐれ_のつ_をと_のあ_をわ_をる_を
その_をお_をそれ_はほ_をじ_をて_の温_の明_の后_のふ_のう_の山_のを_をい_をり
は_の事_のい_をづ_をま_をれ_は時_のの_のこ_のら_をお_をつ_は世_のか_の後_の増_を
源_の后_のより_をさ_をり_をき_をる_は後_のに_をそ_の内_の侍_のあ_をま_をさ_を
め_をく_を統_をら_をる_は汝_のハ_の板_の敷_をと_をら_をく_をあ_をま_をぎ_をく_を統_を
ら_をり_をき_をお_をと_をそ_の天_の内_の裏_の焼_を亡_をす_の神_の統_をら_をり_をあ_をり_を
ま_をび_をり_をぞ_をま_をひ_をく_をり_をん_をご_をん_をの_を極_をれ_は本_のお_をか_をら_をせ_をあ_をひ_を
ら_をり_をあ_をり_を然_をも_のく_をも_をあ_をひ_をご_をま_をづ_をさ_をて_は世_のと_をあ_をら_をじ_を
て_をま_をい_をひ_をつ_を成_をら_をく_をと_をあ_をく_をい_をら_をれ_はあ_をぬ_の神_をとい

る_をあ_をく_をら_をけ_をる_を心_をせ_をら_をま_をを_をれ_をど_をと_をれ_をら_をま_をび_をく_をら_を
て_は袖_をよ_をく_をせ_を給_をり_をき_をつ_をく_をく_をゆ_をり_をら_をれ_をま_をい_を
事_を一_をお_をは_をら_をら_を那_をを_を日_をれ_は記_をよ_を天_の内_の年_の九月_を
女_の日_を申_をれ_は別_を室_を光_を野_を下_を来_をり_を云_を火_を乳_を願_を諸_を羅_を玉_を
温_の明_の后_の末_を之_を尾_を上_を有_を鏡_を面_をを_を經_を八_を寸_を臥_を維_を有_を一_を
張_を四_を親_を甚_を以_を分_を明_を露_を出_を俯_を破_を瓦_を上_を見_を之_を者_を不_を驚_を
或_を記_をゆ_をれ_はく_を小_を野_を之_を後_のの_を事_をみ_をえ_を尺_をお_を説_をけ_を
り_を記_をる_をく_を寛_を弘_をれ_はせ_をう_をり_をう_をみ_をん_を屋_をを_を給_をり_をき_をれ_を
き_をも_をは_をじ_をも_をう_をけ_をを_を給_をら_をり_をき_をり_を耐_のの_を公_を以_を勅_を役_を
乃_を成_をに_をり_を宸_を筆_をれ_を宣_を命_をに_をの_を時_をと_を海_をま_をり

長久熾亡あぞ座けそんせと務給よき座それより
 そのあけをせあひつる所とよりてくつふ入まり
 ていまたりしんそこの世のくつるを神鏡は海
 ろてみえつる神威の目とておのゝかたりあふさ
 ざれども世のくつるめと志考のあふああり
 ゆをせあふそ今け末いぬんあひじとて
 延長八年六月廿九日執真宗法師勅成ありて情
 深なる候とて念佛し侍りたりふ教やうくあけふ
 のひに大あつ人けあひとてはえきり身業とて
 せ成りさあげくえをれあわとて座をくつて

人見つべし又小人のあましく座を座くつらと
 たりて女愛あくあふよりて他ぞとてひをれ勅
 とあつてひの一事とて小人のひをり先度りんら
 大般若の儀後授つる油のしふ授ありとてあま
 事り侍りりの邪氣への授ふよりて是かけん
 とてくつる神ね後れくびの全到般若の儀後授
 事仕の時とて除かりとてけりて養はして大般若
 れゆ授けとてあまふとてあま箱箱の神りりて
 うせあひね身業いりて養はして三升もれ
 法を新羅の神の安場新羅王の子に智徳大師授

唐の附大陳の法也とありんたらふはくかたら成
 わりうの事よはと成れははる圓満後徳の
 ともをき業統とありぬれきり明神よりあてまひ
 て一首の和歌と徳宣一語き成

わりの縁に法満よりはとこころひを

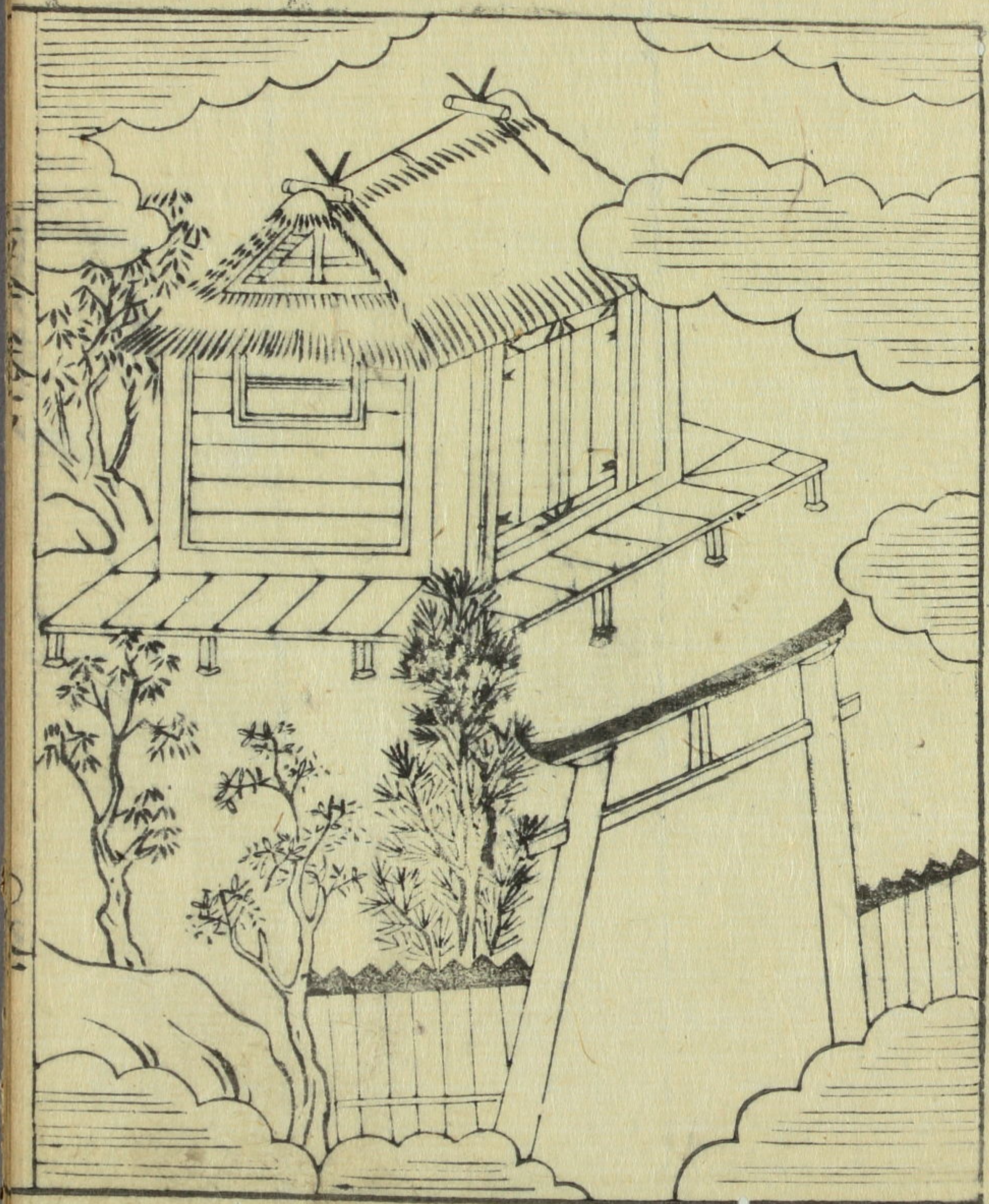
わりの縁りの成ありまきあり

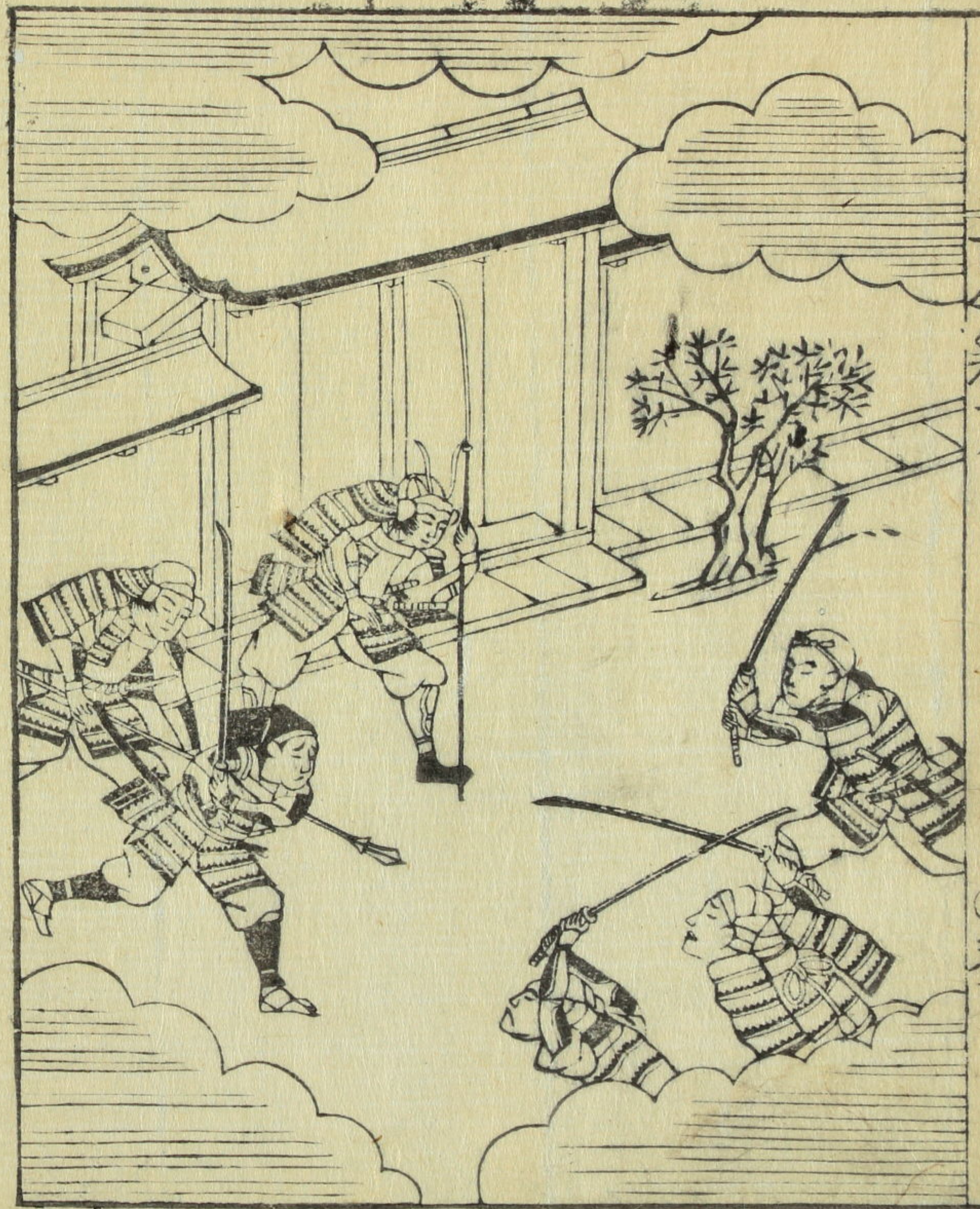
慈覺大師の法短うともひきり対白髪は老翁杖よ
 きびさうりく山よらよりきほぐわれは内裏
 守護といひけ法隆の守護といふ年まぬく成く
 ころころいぞと宣ひありまきがほりころいぞと

アされまれば後者の非ともぞかのりはまは成も
 法威もめでまありきりれ後者のい所たり
 一山和の貴法王大菩薩 法宣といく我
 兜率天の貴法王菩薩之為法護必家法
 為の聖の色松林下久送風霜時有夏若自内
 有佛地願發達公家建立一伽藍轉法輪云
 小よりそ神文とバ達とせききり又傳守
 基中伝きり南社の衣通作と玉津の神と
 之和歌の浦よ玉津の明神とらんは衣通作
 肯皮埔れ風系と饒思食りあよ然これ

まのちりりぞぞ

小野宰相のの さいそう友とも天祚てんそく四世よんせい苗裔なえぎ之の齋さい院いんの流りゅう
 侍しやく續ぞくきくく乃の齋さい院いんの流りゅうににははきりきり文ぶん元げん
 元年げんねんよよちち宰相さいそう大貳だいじ小任せうにんしてして同どう又また年ねん九月くわがつよよ府ふ母ぼ
 つつききてて安あん永えいちちとと志し也やのの一いつ終しゆうきりきりのの堂どう舎しゃありあり
 とといいどもども塔たつ梁りやういいままごごんんのの建けん立りつををんんももああららりり
 わわりりももああららりりとと遠えん笑ぎやうとと始しりり終しゆうりり重じゆう扇せんをを
 りりびび思し念ねんををりりおおももいいふふ永えい観くわん二に年ねん六ろく月げつ廿にじゅう九きゅう日にちにに御ご禱たう
 宣のたまふふいいくく大だい貳じ外がい下げ兼けん或ある大だい南なん平へいにに希けいひひとと為なすす
 亦また西せい岡が大だい貳じ外がい下げ内うち外が大だい南なん孫そん又またおお信しん心しんにに依よりり造ぞうすす





塔トウ写シヤ經キヤウ之ノ大ダイ乳ニウ乳ニウ源ゲン依イ迴クワン謀ボウ令レイ為ニ任ニ督トク傳デン他タ事ジ
 之ノとト遂スガフびビ於オ彼カ合カフ力リキ之ノ人ノ之ノ現ゲン世ゼ後ゴ生シユれル大ダイ乳ニウ皆カ
 歲サイ寸ソウ生シユ之ノ世ノ因イン果カ令レイ勢セキ之ノ家ケ別ベツ也ヤ松ソウ家カみ
 つツらラあアれレをヲ記キすス都ト督トクのノ心シンとト後ゴてテ之ノ身ミ
 がガ伴バン多タ室シツ塔トウ一イツ基キとト寺ジとト腹ハク懸ケン也ヤ又マタ佛ブツとト
 わワんンどド塔トウ死シ千セン部ブとト納ナクめメをヲ佛ブツにニ目メぐグれレ佛ブツ堂ドウ
 とトりリばバくク釋シヤク僧ソウとトりリてテ不フ退タイのノ心シンとトいイふフ心シン
 亦マタのノにニ宰サイ府フれレわワひヒごゴらラ佛ブツ事ジ神カミとト此コノ儀ギ式シキ
 寺ジ勢セキれレわワらラぶブるル以イ牙ガをヲてテあアくク記キすスおオんンはハくク之ノ書カキ
 のノ書カキとト若ニハ付ツくク寶ホウ藏ゾウとト納ナクくク今イマはハ佛ブツりリ積ツク滿マン

今甲子のなる辰にけりきり

ぬくをまひきほぐきゆりて又ゆせを結を

あまれ人のうへもえんあま

ひりさそそれきありとをな

をきとゆらづら中流終る雨くうり流ひをきり
ありれよあうされりし

長曆二年は天衣座主此銀りてさうりき
三升ちれ明る大僧とあらるるは圓白
さりよ執しをまひさり山僧びりて
て十月廿七日又六百人中流してたをける場よあつ

まりて養州とありにさりびりよのりて
交戒もどゆりきり内三年二月十七日山僧
此門あへ事りてさり千八百も集くあ
のしれあまびてあそけき伊平れ
小僧さきくあせを結る程よまよさ
りのおゆりきりのれ程よ山僧山僧明る僧
正と同宗れはえまをれ山僧あま
さりにさりさうり高柳とてゆさふきり
あ僧都座まよあまをり程来良
起の流りんとて秘秘ありきり
言程は月七月

大甲より玉新きなるぬい事なる海づの西行
たどと取りれされ沖減ちて日救ほのせ行
き海平らに八月十日えんより此後宣ふえあ僧
於とめされ多りも後平らぬく沖減ありける厳寺
なりゆ事なり

同年仲法大中臣依國祭主小那りよりざる
月二の酉月二日業祭主此後宣ふ小那りも
ら於んは河のせり遷宮れるよ嚴寺此事大
われた悲れあまふるる六月廿六日依國つる
小作皇の由へ流れよきりりし依國よ七月十日

系文系文の内信よ此後宣ありあふに配はるる
るりびりありきり月十六日あきして此後宣あり
依國が孫依國とめり依國はるる依國と流る
りあるるるるる先自れ後宣あも配はるる那
依國のゆりく大らあり流りありとて那るる
旨道理よそむ事ありと申知りあしはるる
養父あまも依國の由へ後宣此由のさうひをさるる
めとつるる秘定後とそそりぬはしを代とつら
ろとめりりるる後と依をれと後宣あまも
らて知りよつるるるるるるるるるるるる

同日十九日依命下りてこれよりとあるに西徳宣
とあるにまゝなり也下もあつりき處ありし

延久二年八月三日つとれ由一のまれば申すせん

小幡雄の後まて永三年は行ふは明王此國

とあるにしり時よりそと若くそと元生をて修せ

たりこれよりして海濱と見えれども殊一懸あり

きりこのは正新よりあつりなりきりしりさなり

此中なり

後三宗院の時つとめこのつとめ徳廣國はまの徳

あつちつと入つたはあつちつとをたつと宮官との徳

ろつとされくみつとつと徳廣のつとつと徳廣

ありつとつと徳廣のつとつと徳廣

ありつとつと徳廣のつとつと徳廣

ありつとつと徳廣のつとつと徳廣

ありつとつと徳廣のつとつと徳廣

ありつとつと徳廣のつとつと徳廣

ありつとつと徳廣のつとつと徳廣

ありつとつと徳廣のつとつと徳廣

ありつとつと徳廣のつとつと徳廣

三編んせう給多きる行よ大の林也政事つる也
 まひく今一世のわらぶとさかりやと云ふは作らま
 きり新と一背よりゆせ給よりを心と云ふは
 是れ大の林遷神の後ぞ少政而也の若し心也成
 行よ多うたにじて又又はあむしるて天下はま
 ごとく執事給ふかりそくえんの大の林はめくま
 〇元永元年二月九日顯通大納言中納言あまの
 督あくと公に物役ありくとすれは御よつれの首と
 かく宸筆の宣命はさうりぞくそはなまうのそと
 と云つらうとく飛ぬらぬれど目次をくふと云ひて

竹りきん又の大相を御ね本高わくおのき家があ
 事成中きてあつてさうのさうそぞ宣命の事
 傳安二年二月廿三日大納言よのあられきれども
 二月よひの夜はひく又れはとよさたごらて八月
 うやまにかりおとこの事よとらざりやう中流有
 天下宰相中將と云はるぞあまつたれき
 其後お下國務と云はるは保安二年十月
 かりやうんはあまふぬれぬ林と云はりすん
 宰相れりるそ福と云はり人のあそく神國はうら
 んとまねは實前より蛇三百斗ゆらりそ内出ぬ

二川にきり馬にわりく入ぬも後たうんとをれだ
 鳥を万さびまうく神田の橋に極とくひぬさてこれ
 神田の上の管さうりやふれまうんがまれ神りかす仲く
 ねりる地へいろうとのまきまんの土更源の康季六年
 比治元年はたかう海つりまうりわ海あはるはるまありま
 程は鴨川のあましく遊ごころのまのたのみのころま
 厚のまうく最うりありあう程ははるはるまありま
 まあまのいふまをいろうれを治りまうりたは神田たせ
 つて神田よりあうりまうり程はあうり神田はまうり康季
 があまのまをまひく程はあうり神田はまうり程はあうり

氏人た成じくよあうりまうりあうり神田の上よたはら
 わりまうり成せまうりまうりあうりまうりあうりま
 海戸へひうれまうり康季く神田はまうり神田はま
 あやうりまうりまうり神田の神小近康原洞康実康
 果代へまうり成まうりいふ神田はまうり神田はま
 重康原もい康季が子孫まうりまうり神田はま
 ころ地あまうりまうりまうりまうり

保安又年八月朔日行ぬれ神田はまうり神田はま
 神田はまのまのまの神田はまの神田はまの神田はま
 まうりまうりまうり神田はまの神田はまの神田はま

之志のひく宮命と成りてくお内祀相承也幸る
とぞ号きく統くろひ宮命く多くは神感之とよ
自後せしきをゆよして二月五日にけくゆり
より幸りてやけん

裏書云 彼宜令伺

天皇 始肯止 掛長 其大神乃 廣前 尔忍 忍
申給此 申頃 今年之春 尔作之比 雨澤頃旬 天年
穀有年 信支 由 令祈 申給 而 神明 乃 為 鑑 尔
依天 稼穡 豐登 期給 頃月 早雲 久凝 膏雨
不瀟 天 百穀 涉枯 礼 万民 苦業 都信 大神 日域 尔

出跡 信留 遂窟 兩師 傳名 信留 靈詞 然則 名山 大
澤柳 興雲 之 致雨 天 赤土 得 御澤 之 應 濟 疇 誇
収獲 之功 此 波 大神 乃 无限 冥助 尔 可在 之 所
念行 祭 故 是以 吉日 良辰 擇定 天官 位
姓名 中 卷使 天 礼代 乃 大幣 乎 令捧持 黒屯
乃 御馬 一疋 奉 副 奉出 賜布 掛長 大神 此
狀 乎 平久 聞食 天 炎氣 忽 散 天 嘉 澍 旁
降 天 田園 滋茂 天 人民 豊稔 祭 良 天皇 朝廷
平 寶位 魚動 久 常石 堅石 尔 夜守 日守 尔 護
幸給 比 食国 乃 天下 平無 為 無 灾 尔 守血 給 止 倍

忠義 忠義 申 捨 波 申

保延五年九月一日

作者内記文屋相水

澄元は常保延八年に兵福を討つるに敗るるに心を
なげられしに澄元はしるすに兵福の軍
を討てて十月九月のうら兵福を討つるに
かり澄元は方れと申しんはるる合戦は
及く澄元は方の軍兵多く命とすかひはるる人
もたふさうははより澄元は後の頃と切く西の方と焼じ
りあづまは下かあよりたれと申し澄元は其のけし放火れ
がごとくつる物をかりちれおの小あ一二を焼くをれし

あつりてと見えより大く合戦れりやとた多うり
ま月日は見えしを合戦とて足ばかりはるる人
義もそは奇れ方の島麻れとてあけまてと見たり又神
時澄元はあつりてと見えしを合戦とてあけまてと見たり又神
やとてあつりてと見えしを合戦とてあけまてと見たり又神
あつりてと見えしを合戦とてあけまてと見たり又神
かりたの神れはと見えしを合戦とてあけまてと見たり又神
ありし事へあ入道あつりてと見えしを合戦とてあけまてと見たり又神
は家の事ありと見えしを合戦とてあけまてと見たり又神
いりての事ありと見えしを合戦とてあけまてと見たり又神

花よりふふとくとも
 てふより厚きとぞ
 下藤をれれとて
 新保二年二月廿三日
 貴より従二位をゆるされ
 同日よみ知はかり
 此より新保は
 従二位をゆるされ
 十月廿三日

花よりふふとくとも
 てふより厚きとぞ
 下藤をれれとて
 新保二年二月廿三日
 貴より従二位をゆるされ
 同日よみ知はかり
 此より新保は
 従二位をゆるされ
 十月廿三日





けぐもうくみしあつさにあつさをば永方元年八月廿日あつさ
 と辞しじてさう二佐成さう由ゆりさうんざうらぶをんをんをんをん
 加階かのけいめぐときれん實じつ仲ちゆうのあえんのあひのうく
 思しうれるとぞりしてあのしれれるも成せの人があ
 わえりのさりあひのまびくうの成せのしてひのくにある日にあ
 張はりのめを成せのあのまにあるにはあるにあるにあるに
 若わくや成せのあるにはあるにあるにあるにあるにあるに
 あひのさり成せのあましとくにあるにあるにあるにあるに
 せのりのまれたりのあるにあるにあるにあるにあるに
 小このりのあるにあるにあるにあるにあるにあるにあるに

思ふげく事なれと傳へせられど信傳の傳の心
知れぬの心なれと傳へせられど信傳の傳の心
秀句も多くと傳へせられど信傳の傳の心

羅官志九子自 五恨將遠大友

かきつけしハとせよなりあそんれり

治しとてし所のとけりあり

こゝろを定めて其の人いそむけりあり
わけて年月とせり程は治承元年三月又月妙音
の御とて内大臣とせりありしを傳へせられど信傳の傳の心
を傳へし小松の御とて大納言とせられど信傳の傳の心

向大寺小の御とせられど信傳の傳の心
六月又月内大臣とせられど信傳の傳の心
まひ願ひありとせられど信傳の傳の心
月日れとせられど信傳の傳の心
なごの御とせられど信傳の傳の心
なごの御とせられど信傳の傳の心
同三年三月晦日いづく傳へせられど信傳の傳の心
大納言とせられど信傳の傳の心
とせられど信傳の傳の心

入道その時大納言なりしと云ふ此大納言長久保の仲およ
 てゆりきりもおしきり伸りしはなれりしや
 仲おの時の室あはくちを帝系此曲とやらぬ徳が
 面白なるもの仁安元年六月にわかれさかりきり
 女の妻よ天下の政を法りるなりかや家の大納言
 日中必法持く徳ありとてせ給ふははえりきり同
 七月上旬祝久継が妻中と同新よんてざりきり
 泰親時時とてり占りせきりて実妻なりきり
 治承元年九月宮舎此院いつくし海よあきありきり
 四代又といふ所事ありて下

善愛なる
 徳とせ給ふる

希代のりあや枝りたてに目おなりきりて故日よ
 是人之内が浦就短長此中くまのきりておん
 真福なる徳のいも徳網をくぬのりきりきり
 子生をくぬを徳をいしはわくろきりてきりて
 小糸のりくくきりたてきりてきりてきりて
 しあひさえて八徳は徳ぐ七日ありて新念あけりよ
 おもひよゆきげありきりてきりてきりて
 田舎面よりきりてきりてきりてきりて
 きりてきりてきりてきりてきりてきりて
 伴の徳年系あやきりてきりてきりてきりて

お難まづさうのりし樂よやそのけりいりおまひ
 うぶひんくおあゆりしほほくゆとよせまひよりけ
 そうこのあふ成字くはあ人の作ふくこころを成を
 中へ人よぬきれどま自たの作れゆりたりなりを
 てぞりお着さあぬきん今生れけらあんせうれ
 来世のさくごひしきあのりくそくく本が物り
 地ふかく後まのほめ成をげそつあふはせまをびよ
 きりび事山の恒常の福の種を日長れぬけさ
 世法をりぬめよすこころづりぬけさ
 作とてやんやんあといすきよきりこころ八徳よあ

塵世をりたりさうまよ所成の所成なり一実をさめひく
 誠よけさゆきそて武内くめをれぬ長くまを
 いてのを見まれどさ白髪の時なりまはぬ
 分のあひぬあふ小畏くさあひひひげ白く
 ては指さけとむりりきり又成れ内より色
 れゆきそて世中されなんぬきく時段がまよ
 かりく世成法と作せぬと唯禱して
 おいあゆとあふに成さあまきり世中とさうま
 義附お下は成後身あやその子奉附まぐも
 人ああわさりきり

ごとく平とく人ありわねし
 然るに盲目の者有燈とて之を眼の明くらん
 と祈るは多かりけつとめ之身よ妙よされ先はけり
 されど燈現と帳のせして打卧つる身よはけり帳の
 しんれなきよわし秘た先世のじつひを知らざるは日
 常の真あはけはここの河の橋渡なる者後とて南無念
 三所燈現とよ下臨人よありまるとまてそ縁あり
 て真縁の身とわくあてしあはけはけり人よ縁得
 たりは縁外は老よわし縁縁とて又事世不明眼を
 えそは縁よ昇をまてさしひよ縁はさすまてし

みどりよ我を悟るありやとむじめあはてんくこあふ
 きりそ後えんげしてつねとらりては彼とつとめあは
 ねし眼もあはしあまり
 妙得は先強んえ進れあがし那平日那若人若教
 の進ん入十ふあありては識中も補せたりも縁とられ
 養王寺ふりそそありきり
 ぬ川のあさりふなりそよまみなり
 縁まも厚ぬあやおそりん
 是れゆよゆあそりそ降りきり
 あさりあはけりそまてそはの

かゝれもやふいのおおとひそ

承久元年正月十日大印元良業志のありきるふ
 十六日れあつては海島船高が着よお成此はあ
 めく除目とこあつてきとていふ海よ小折紙大印
 記あつてのりつてて半きつ方とんく是よきり
 けとていふゆめつたつげつりきれど多くはう向つ
 くるちつと是く是ありし是きるもやどてその状
 大印記よあふきつらまて記り仲陸助後降る作季
 中へ懸らるべきは人作方の大監酒よといふは備官と
 たりとれぐらふおねいふもていふもきりき代は

二のののきれたりし人おけりきるふ小印部兼と
 ありてを途とせしとては同部友行のものなり
 前大和守為原守流のあきよつてはつてたま射と
 のりつては若くはありきは海河多流射よあけつんとそ
 出社此を屋を造をあつりきり嚴業のあ切よそ社家
 推奉ちけきばつてつてとやもあつりきるんてむくの
 らもくふとれよきりき徳が部社の作よて作き海
 のよや付てちりこれお初後せき移きる新小海とあ
 みつるあよいありよりお成集るるのよ人出あひく
 是をよくふりの西史れやとらん新流があらは海よは任

